

特集

よい施設の 育て方 見分け方

Photo / 川上哲也



Part 1

高口光子さんに聞く 施設のつくり方・育て方

聞き手◎三好春樹

介護アドバイザーとして八面六臂の活躍をしている高口光子さんが、老健「鶴舞乃城」の立ち上げから関わり、開設後には看・介護の責任者を務めることになりました。なぜいま介護現場に立ち返るのか？ どんな施設をつくろうとしているのか？ 個室・ユニット対策は？ 興味はつきません。オープン直前の「鶴舞乃城」で三好春樹がインタビューしました。

最低・最悪のところで働いてきた理由


三好春樹：新設の老健の看・介護長という仕事をなぜやろうと思ったのか。まず、その動機から聞かせてください。

高口光子：私はケアの世界に入って四半世紀たちます。最初は病院、次に特養、老健です。この3か所に共通しているのが、その当時〈最低・最悪と呼ばれていたところ〉なんです。

PTとして初めて入職したのは老人病院でした。当時、老人病院は薬漬け・検査漬けでお年寄りに

最悪なケアをしているということで老人病院バッシングが最も盛んな頃でした。入院患者であるお年寄りは社会のやっかい者と言われ、働いている職員も落ちこぼれだと揶揄され、そこにある老人病院は社会の必要悪だとまで言われていました。でも実際に働いてみて老人病院には老人病院のおもしろさがあるということがよくわかりました。その老人病院で生き抜こうとしている老人がたしかにいる。たしかにいるのだけれど、やっぱり病院はお年寄りには向かないと思い、それで次に特養ホームに移りました。

三好：最初に入職した病院が本当にひどいところ

6  高口さんの「他人の意識の低さをなじる前に、今日の目の前の一人のお年寄りの介護のひとつを自分で変えて取り組みなさい」の言葉が頭から離れません。要するに「まずは自分が変わる」ということだと思います。常にそこから離れない高口さんに敬



つるまいのしる
「鶴舞乃城」 基本データ

〒424-0114 静岡市清水区庵原町3158
TEL 054-361-1234
FAX 054-361-0800

開設年月日：2007年4月1日

サービス内容：入所100床
ショートステイ10床
デイケア30名
居宅介護支援事業

**職員
募集中**

で、理事長が逮捕されて警察の捜査が入ったりしたそうですね。その後に良心的な病院に移りましたが、そこでもやはり老人は病院には向かないと思ったのですか？

高口：そうですね。熱心な取り組みをして社会的にも高い評価を受けている病院はいくつかありました。でも、職員の熱意とは別に、私は病院という設定自体が〈古い〉には向かないと漠然と感じていたんですね。

なかでも強く確認したのは、お年寄りは病名で呼ばれることをいやがっているということです。「3号室の脳卒中の患者」ではなく、「田中太郎さん」という固有名詞で呼んでほしい。人は病名で死ぬのではなく、固有名詞で看取られ死んでいきたいのだという実感を病院でもつようになりました。

しかし、病院では固有名詞より病名が先行します。それは治療の場としての病院という環境要素からしてやむをえないことなのでしょう。そこをずらすと病院という機能が果たしにくくなります。ですから、病院で老いと向き合う職員は、病院という機能に付随する社会的要求と、お年寄りの人間的要求という2つの要求の間で葛藤しながら働くわけです。病院が要求するものとお年寄りの要求するものが違うという矛盾の中で、自分の

仕事を続けることが興味深いと思える人は老人病院で働いていけるし、たしかにその仕事はおもしろいと思います。

それでも、老いは病院には向かないと思ってしまった自分で考えました。「では、どんな場なら向いているのか？」あたりを見渡すと、「生活の場」と言われ始めた特養ホームがありました。

特養ホームには、資格や白衣や医師の処方などと関係のない介護職として入職しました。特養ホームという場も当時、やはり最低・最悪な場と言われていました。医療的にも社会的にも不勉強なところでしたし、寝たきり状態のお年寄りを無目的に受け入れて、墮落した場だとも言われていました。でも、特養ホームでは医師の処方箋だとか白衣だとか、それぞれの職種から湧き出る安直なセクショナリズムだとか職種別の専門性のあつれきによるストレスから少し解放されました。仕事はとても楽しかったのですが、そのかわりに、なんともつかみどころのない不思議な感じがありましたね。

そして、その次の就職先である老健には介護アドバイザーとして関わりましたが、そこも最低・最悪でした。当時の老健は、三好さんを筆頭にボロクソに言われていた頃です。“中途半端施設”



高口光子（たかぐちみつこ）

1982年、高知医療学院を卒業後、理学療法士として福岡の老人病院に勤務。1995年、ヘッドハンティングで「特養ホーム・シルバー日吉」へ。2007年春より介護老人保健施設「鶴舞乃城」看・介護長。

著書に『いきいきザ老人ケア』（医学書院）、『仕事としての老人ケアの気合』（医歯薬出版）、『ユニットケアという幻想』（雲母書房）など多数。

とか“介護もなければ医療もない”なんて言われていました。ふりかえってみれば、その時々で最低・最悪と言われていたところばかりで働いてきた25年ですね（笑）。

三好：それはなぜなんだろう。マゾ系なのか、サド系なのか……？

高口：クセかな（笑）。最低・最悪というのは落ちるところまで落ちているわけで、あとは上がるしかない。それから最低・最悪は、意地と見栄と体裁のるつぽなんです。私は、意地と見栄と体裁とそれから、“かくあらねば”のがんじがらめの中でもがくのが好き（笑）。やってることと言っていることが全然違う、会議では強がり、申し送りはいいかげん、記録は適当、理事長は人間的に全然尊敬できなくて、施設長は朝と夜では言うことが違う、職員はいがみ合いとさぐりあいと足の引っ張り合いをしている……、こんな環境が好きなんです。

三好：どういう人生を送ってきたんだろうね（笑）。

「鶴舞乃城」看・介護長を引き受けた理由

三好：介護アドバイザーという仕事で全国を飛び回るようになった高口さんですが、フリーになってしばらくした頃、彼女はこう言いました。「私の仕事好きだわ。自分に合っていると思う」と。これは珍しいと思いましたね。男性の場合はそういう言い方をしません。「本当は現場にいたいんだけど、新しい介護をつくるためにフリーになります」みたいな言い方が多いのです。しかし、そういう自分に合っているアドバイザーの活動を1年間封印してまで、老健を立ち上げて、新しい職員集団をつくらうというのはなぜなんですか？

高口：確かに人前でしゃべるのは大好きです。そこで笑ってくれたり、うなずいてくれたりすると、病みつきになります。だけど、私が学者でも学校の先生でもないのに人前で話せるというのは、現場で見てきたことや、やってきたことがあるからだと思っています。

私にとっては、しゃべることと書くことと現場で働くことは同じなんです。現場で働けばそれを人前でしゃべりたくなるし、しゃべるときちゃんと書いてみたくなる。書いてみるとなにか新しいモノが見えてきたような気がして、もう一度それを現場でやってみたくなる。講師・著者・現場が私の中ではバランスがとれていて、確かに居心地がよかったです。

ただ、ここまで老健、特養、病院、在宅をやってきて、やっていないものが一つあった。それが“最初からやる”ということでした。今まで腐りかけた病院とか、どうにもならない特養とか、落ちるところまで落ちた老健とか、そういうところをひねったりたたいたり、もち上げたりすることに取り組んできましたが、最初から凶面を引いて人に声をかけ、勤務の組み立てをするというのはやったことがないのです。

これまで、マイナスからスタートして、それをどこまでもっていくかという仕事でした。ゼロ

から仕事を組み立てて仲間づくりをしていくことは、これまで一度もないのです。今回こういう機会をいただいて「やってみよう」と思いました。

「全室個室・ユニット」の中身

三好：そんな経緯で取り組み始めた新設の老健は「全室個室・ユニット」でした。小規模は有利な点もあるけれど問題点もある。肝心なのはどんなケアをするかです。そのために小規模という点を生かせるかどうか。生かせないとしたらむしろ関係が煮つまって問題点が出てくるよ、ということも私も彼女も言い続けてきました。

ところが、行政は「新設の老健なら個室・ユニットにしろ。そうでないと認めない」などと言うんです。「鶴舞乃城」もかなり理不尽なことを言われています。そのあたりについて少し話してください。

高口：三好さん、関係者のだれがここに来ているかわかりませんから（笑）。昨日竣工式で市長さんからご挨拶いただいたばかりなんですから。

三好：熊本から来たよそ者の高口さんが言わなければ誰が言うんですか。

高口：三好さんは今日で帰るからいいでしょうけど（笑）。

「鶴舞乃城」開設の話は約3年前に出ました。紆余曲折があって、本格着工となったのが2年前。静岡県からは「新規開設の老健であるなら全室個室のユニットケアで」と言われました。私は全室個室もユニットケアも大嫌い。けれど、ここまで話が進んでいるのならしかたないということで図面が引かれました。

静岡県の設計指導は、全室個室で10の居室が取り囲むようにして集う場所をつくりなさいというものでした。要するにリビングが真ん中にあり、それを囲むようにしたつくりで、出入口を1か所にした仕切りを明確にしたものです。

図面を書いて、生活介護研究所の坂本宗久さんに相談しました。彼はユニットケアのいいところを引き出して、施設改革に取り組んでいこうとし

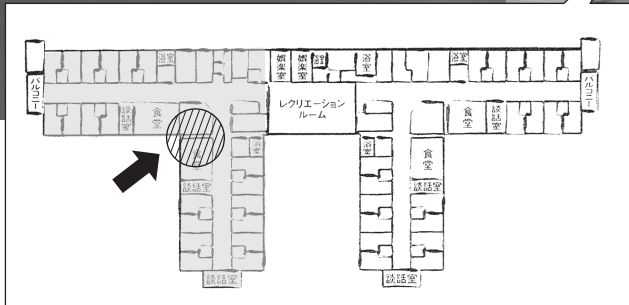


三好春樹（みよしはるき）

「月刊プリコラージュ」編集発行人。1950年生まれ。1974年から特養ホームに生活指導員として勤務後、九州リハビリテーション大学卒業。再び特養ホームに戻り、理学療法士として勤務。1985年より「生活とりハビリ研究所」主宰。

ている人です。坂本さんは「その図面は最低・最悪だよ。そういうユニットケアが職員を苦しめるんだ」と言いました。私の中でカチッとスイッチが入りました（笑）。「最低・最悪」が出たからです。じつはそれまでずっと迷っていました。新規開設、全室個室、ユニットケア……、どうしようかなあと迷っていたのですが、坂本さんが「その図面、最低・最悪」と言った時、私は「やろう」と思いました（笑）。これはやりがいのある仕事になりそうだと感じました。

私が心配したのは視野と動線です。20人のお年寄りを職員1人でみなければなりません。中身についてはこれから職員やお年寄りといっしょにつくりあげるとしても、視野をどう確保するか、動線をいかに効率的にするかを考えて図面を変更しました。その変更した図面を見て静岡県は「これはユニットケアではない」と認めてくれませんでした。そのうちに清水市が静岡市と合併して、静岡市が政令指定都市になったので指導が県から市に変わりました。同じ図面を今度は静岡市に提出しました。OKが出ました（笑）。



L字形につながった食堂の中央にあるキッチン。食器を洗うお年寄りの慣れた手つきが見事！

全室個室・ユニットだからこの工夫

三好：館内を見ていただければわかると思いますが、10床と10床が真ん中でくっついて、1人で全体が見える構造になっていますね。うまくごまかしたと言え、そうとも言えますが（笑）。

高口：全室個室で10人、10人でL字になっています。1ユニット10人の空間をつなげる、真ん中にキッチンをつくりました。このキッチンから左右にいるお年寄りが常に職員の視野に入るように構成されています。見守られたいけど見張られたくない、大勢の中にいたいし1人にもなりたいたいのがお年寄りのニーズと、とらえました。看護介護職の動きに縦動線はつくらない。そしてお年寄りの食事・排泄・入浴の動線を短くすること。ここが設計上私が一番こだわったところです。

老健はグループホームより人数体制がきびしいのです。グループホームは9人を3人でみますが、老健は40人のお年寄りを4人か5人くらいでみていかなければなりません。40人に対して早番が2人、日勤が1人、遅番が2人、夜勤が2人とれるのが精一杯です。そうすると、日勤でフロアに職員1人という時間帯が出てくることも十分に考えられます。

しかし、老健の弱みでもあり強みでもあるのが職種の多さです。リハビリがあります。調理師、栄養士、相談員がいます。そして、もちろんグループホームや特養に比べてナースが多くいます。職種が多いから面倒なこともあります。私はこの職種を生かそうと思いました。

厨房の工夫とキッチンへの想い

高口：まず考えたのが「フロアで調理をする」ということです。私は配膳車をなくしたかった。厨房の職員と介護職員は大体仲が悪い（笑）。なぜ



白板と記録が乗っているこのワゴンが
ケアステーションだ

か？ 日ごろ姿形を見ないからですね。おばちゃんたちが何をしているのか見えるように厨房をガラス張りにしました。厨房の先が救急搬入口と職員通用口になります。職員は出勤したら必ず厨房に一度手を振ることを規則にしたいと思っています（笑）。

厨房で半調理したものを、調理師がカートに乗せてそれぞれのキッチンへ運びます。そして、キッチンでお年寄りや職員といっしょに調理します。調理師は調理には詳しいのですが、調理とお年寄りを結びつけることは不得意です。今回 OT を 5 人雇うことができました。1 グループ 20 人に 1 人の OT をつけて、調理とお年寄りをつなげることが彼らの課題になると思います。

私はお年寄りや職員が集うきっかけとしてキッチンを考えました。ユニットの真ん中にあるキッチンをお医者さんも施設長も事業部長もさまざまな職種がいっしょに食べるきっかけにしたいと思ったのです。視野動線を確保して、キッチンを通る道にもってきた生活形態の提案から、そこにいろいろな職種が集い、いっしょにつくっていっしょに食べるということです。

生活リハビリ浴槽にした理由

三好：だんだんケアが具体的な形として見えてきました。よく OT が 5 人も集まりましたね。高口のもとで働くなんてたいしたものです（笑）。

お風呂はどうですか？ 私がフリーになって 22 年、お風呂は目に見えるということもあって、このところ少し変わってきたかなと思います。「ききょうの郷」で機械浴ゼロを実現しましたが、「鶴舞乃城」のお風呂はどうですか？

高口：お風呂の種類はいろいろありますが、機械浴だけはありません。各ユニットには正方形で小さいお風呂があります。これは痩せた小柄なお年寄り用です。小柄なお年寄りは普通のお風呂に入ると浮いてきますから。この正方形の浴槽は「ききょうの郷」でも大変重宝したので、つくりました。

それから、普通の家庭にある長方形の個浴も各ユニットにあります。浴槽の両サイドが空いていないと困る方もいますので、両サイドが空いている浴槽も 1 つつくりました。両手両足が伸びきって拘縮したお年寄りは個浴ではサイズ的に無理があるので、2 階のリハビリ室の奥に大きいお風呂をつくりました。このお風呂には、元気なお年寄りは温泉気分、2、3 人で入っていただいてもいい。

デイケアにはかなり大きいお風呂が入っています。それは在宅の方は家と同じお風呂ではつまらないからです。むしろ温泉に遊びに来たという感覚で楽しんでほしいと思っています。これでどんな人が来てもお風呂に入れます。

三好：「機械浴はありません」と言うと、「ここは軽い人しか入れないですね」なんて言うケアマネがいたりしますが、そういう人は介護を知らない



ユニットに設置された両サイドが空いている個浴

デイケアの浴室
大小さまざまな浴槽が低い目隠しでうまく配置されている。奥に見えるのが温泉気分を楽しめる大浴槽



人だと思ってください。「鶴舞乃城」の職員さんも、これから一人ひとり老人が入居されるたびに介助法をマスターしていくことになりますね。

高口：内覧会の時に「ここは機械浴はないのですか？」と不安そうに聞かれるご家族がいらっしゃいました。介護の世界で仕事をしている私たちは、ちゃんと介護技術をもっています。介護技術におけるトランスファーはコミュニケーションです。この人とお風呂に入りたいという気持ちをお互いにもてるかどうか、そこが個浴の介護技術のポイントなのです。

この人にお風呂に入ってもらいたい。この人といっしょにお風呂に入りたいという思いがないと技術は得られない。技術がなければ思いも果たせない。それをわかりやすく私たちに伝えてくれるのが個浴（生活リハビリ浴）なんです。

ただ、お年寄りは手足の拘縮が強かったり、クニャクニャしていたり、気管切開をしていたり、いろいろですので、ご家族が「うちのおばあちゃんにはこんな風呂は無理なんじゃないか…」と不

安がられるのは当然です。無理強いすることはできません。私たちが迷いながら、話し合いながら重度の方のケアを実践している様子を見てもらって、納得していただくと思っています。

「ききょうの郷」の体験からいっても、そんなに時間はかからないと思います。一番説得力があるのは、お年寄りの笑顔とおだやかに入浴されている様子ですから。

トイレにテーブルをおいた理由

三好：一番大事な排泄ケアの基本的な考え方を教えてください。

高口：車いすトイレは、通常壁側に便器が取り付けられています。便器と車いすが正面から向き合って、1回立ち上がって半回転する動線を必要とします。これがお年寄りのトイレ利用を困難にしたり、職員の介助を大変にしていました。

「鶴舞乃城」の便器は、壁側に付けるのではなく手前に位置付けていますので便器の横に車いすを

置いてお年寄りには横の移動ができるのです。アームレストが脱着式であれば、自力移動で排泄ができる人もいられるでしょう。また、右片マヒ用と左片マヒ用トイレを全部のユニットに設置しました。

もう一つ、小さくて狭い押し入れトイレをつくりました。これも坂本さんから教えてもらいました。歩行器に両肘を乗せて歩く方がいます。また、支えがあれば2、3歩歩ける方がいます。そういう方は広いトイレは不得手です。どこかに手があたっていればなんとか移動できるという方のために、この狭くて小さいトイレをつくりました。

あえて居室の中にトイレと洗面台をつくりませんでした。個室の最大の問題点は居室からいかに出てきてもらうかということだからです。これは「誠和園」（広島県）の村上広夫さんから教えていただきました。私は洗面とお食事からまず部屋から出てきてもらいたいと考えています。各居室の近くにトイレをつくりました。安直にオムツを使うことなく、職員の声かけ誘導や排泄パターンにちゃんと注目して、日中は布パンツにパッドを当てることで過ごしてもらえればと考えています。



押し入れトイレ：支えがあれば歩ける人はこのトイレで排泄が自立できる

三好：トイレ内に小さなテーブルが置いてありますが…？

高口：便器の前に付ける手すりは値段が高い。1本や2本なら問題はないのですが、全室個室で動線を短くしようと思えば、どうしてもトイレの数が多くなります。経費節減のために手すり以外のもので代用できないかと考え、業者さんに相談しました。「手すりは高いし、一度固定してそれが握れなかったら使いものにならない」と言ったら考えてきてくれました。それが、この小さいテーブルです。

まず、肘から手首までの前腕をしっかり支える幅がある。深く座ってふんばる時と、お尻を拭いたりパンツを上げたりする時には少し前に出すことができる。それから、車いすに移乗する時の微妙な斜めの角度というのも、この小さいテーブルで出せるようになりました。手すりより値段が安いので、経費的にも助動的にも役立つものだと考えています。

三好：このテーブルはよくできていますね。身体を前屈させて前で支えるのが排便に一番いい姿勢です。また、頭が前に出なければ人間は立てませんが、このテーブルでその生理的パターンを誘導できるのです。手すりだとどうしても斜め上に引っ張ってしまうのでパターンが崩れます。床から立ったり、床に座ったりする時にも使えますので、もっと介護現場に普及させたいですね。



便器の前にあるテーブルに注目！





「鶴舞乃城」玄関。う〜ん、立派だ



オープンな事務所

玄関を見てください

三好：ここはぜひ見てほしいというところがありますか？

高口：正面玄関です。お金がかかっているのはここだけですから（笑）。玄関にこだわったのは、お年寄りをひとりの大人としてきちんとお迎えしたいと思ったからです。施設に入りたいと言う人はいません。自分の親を施設に入れたい人もいません。大きなあきらめと深いいきさつをたどってこの「鶴舞乃城」に来られるわけです。親と子が坂道を登ってきて「おじいちゃんここだよ」と見せるこの玄関で丁寧にお迎えしたいと思いました。

入った正面に事務所があります。事務所には事務職の机と居宅介護支援事業所と施設系の相談、訪問、通所の事務所、そして、看護・介護・栄養の机が並びます。これらを分けずにワンフロアにしました。分けると仲が悪くなる（笑）。同じ場違いに過ごすことを一つの工夫としています。

本気で人と向き合いたい人、 集ま〜れ

三好：人材を集めることも大変だったようですが、

なんとかなったのですか？

高口：おかげさまで介護保険法の職員配置基準である3対1は確保できました。介護職のうち半分は新卒の学生です。真っ白で何も知らない。残りの15人ないし20人が経験者です。

三好：社会に出て初めての職場の上司に高口がいるというのはすごいですね（笑）。

高口：私もドキドキしています。経験者の何人かは、私の講演を聴いたり本を読んだりしたことのある人。あとは家が近いからとか、どさくさで紛れこんだという人のほうがずっと多い（笑）。

ナースで特徴的だったのは、もともと人が好きで看護の勉強をしたのに、病院で働いていると結局「あれをしなさい、これをしてはダメです」と言ってしまう。いいナースになろうと思えば思うほど命令口調で日々を過ごしてしまう。「私は何をやっているのかわからなくなりました」と言うのです。飛んで火に入る夏のナントカです（笑）。

私は当初、看護師は来ないだろうと思っていましたから、広く浅く「来てくださ〜い」とゴマすり呼び込むつもりでした。だけど、本当に人と向き合う仕事がしたいというニーズはナースの中にも確かにあるんですね。そこで募集の文言を変えて「医療的処置のみでなく人とちゃんと向き合える看護、それをしたい人来てください」とした



ら反応がありました。

今の看護でいいのかと素朴に悩みつつ、病院の固いヒエラルキーの中を抜け出せないまま自己嫌悪で看護をしているナースがいることがわかりました。「鶴舞乃城」にはそんなナースがたくさん来てくれることになりました。大変たのもしく思っています。

転職に伴う罪悪感とは何だ？

高口：介護職の経験者に共通していたことは「やりたいことがあったんです。やり通したかったけれどやれなかった。言葉ひとつ発せられなかった」。そして悩みはこうでした。「私はずるいんでしょうか。今の職場で発言もせず、やるべきことをやり通さないままに、『鶴舞乃城』ではできるかもしれないと思って入職するのは悪いことなんでしょうか」「お年寄りを見捨てるような気がする」とか「仲間を裏切るような気がして」などという言葉がよく出ます。

そういう職員に私はこう言います。「人を捨てるとか捨てるという発想自体がおかしい。あんたが仮にそのお年寄りを見捨てても、そのお年よりはちゃんと生きていくから」と。

どんなご縁か、看護や介護を通じてそのお年寄

りと出合った。そしていろいろなことを勉強させてもらって新しい課題が見つかった。罪悪感とか、裏切るとか、見捨てるとかという言葉ではなく「おばあちゃんと出会ったからこそ、これからの自分の課題が見出せたよ。これからがんばるからね」と言えた時が、真にお年寄りのニーズに応えたことになるのではないのでしょうか。

お年寄りには悲しむどころか、「行っておいで」と言ってくれるはずですよ。そして、一時のお別れで泣くかもしれませんが、次に挨拶に行った時には「あんた誰？」と言いますから（笑）。

仲間もそうです。残ってがんばる者もえらい。そして学んだ矛盾を胸に抱えて新しい職場で一歩踏み出す人の元気を残る人は学ぶのです。「裏切るとか捨てるとかという言葉は、人に対して失礼じゃないか」と、私は思います。

三好：「裏切る、裏切らないは左翼運動の時に言うコトバ」という感じがしますね。誰だって自分に合う仕事、職場を探せばいいんです。変な使命感で仕事をするのは不自然ですね。

いよいよ動き始めた「鶴舞乃城」。これからの展開を大いに期待しています。

(2007年3月13日「鶴舞乃城」オープンセミナーでの対談に加筆・修正しました)